

現場で役立つ
プログラミングのちよい技

第1回 プログラムは見た目が決まる!?

邑中 雅樹

本連載では、プログラミングを職業とする上で欠かせない雑多な知識やコツを紹介していく。第1回目はプログラムの見た目についてだ。誰もが綺麗な女性が好きなように、プログラムも綺麗な方が好まれるようだ。

(編集部)

今月からしばらくの間、ソフトウェア・プログラマ向けの連載を受け持つことになりました。

編集担当からは、初心者向けの記事となるようにと言われています。しかし、プログラミングの入門記事は、本誌のバックナンバを含め、山のようにあります。昨今は、組み込みシステムにターゲットを絞った入門書も少なくありません。そして、想定読者は、生産効率を重視すべき立場の組み込みエンジニアです。いまさら車輪の再生産をするような連載は、率直に言って退屈であると考えました。

しかし、せっかくの機会です。連載の趣旨は汲んだ上で、従来のプログラミング入門とは違うアプローチで進めることにしたいと思っています。いきなり話を進めると読者の皆さんは戸惑うかもしれません。そこで、本題に入る前に少し誌面を割いて、このようなアプローチを採るに至った理由を述べておきたいと思います。

● プログラミングのできないプログラマ?

数年前に、プログラマたちのコミュニティで話題になったエッセイがあります。作者はJeff Atwood、ソフトウェア・エンジニアであり、著作もあります。彼はCODING HORRORというWebサイト(<http://www.codinghorror.com/blog/>、図1)を持っていて、そのエッセイはこのサイトが初出のようです。タイトルの和訳は「どうしてプログラマに…プログラムが書けないのか」。和訳もWebにはありますのでぜひご一読いただきたいのですが、誌面に限りがありますので、一部のみ引用します。

レジナルド・ブレイスウェイトが書いていることを読んだとき、私はそんなわけないだろうと思っていた。

私と同様、この著者は、プログラミングの仕事への応募者200人中199人はコードがまったく書けないということで苦労している。繰り返すが、彼らはどんなコードも書けないのだ。

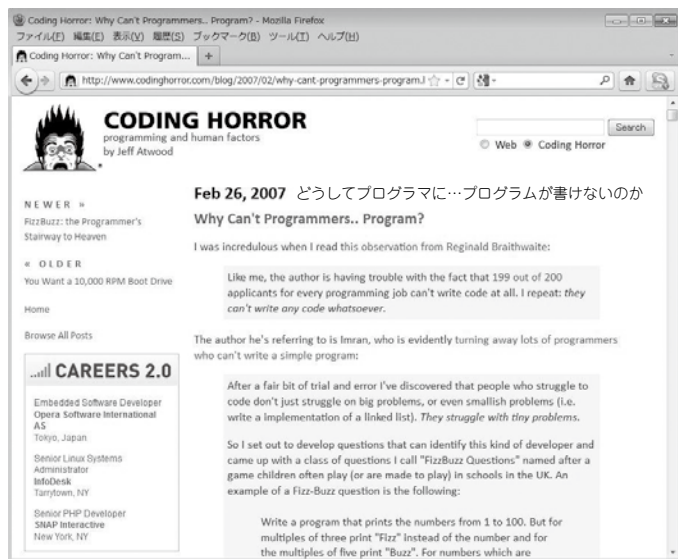


図1 CODING HORRORのWebサイト

サイトのタイトルがCODING HORROR(コーディングの怪談)であることから類推できるように、やや大げさな書き方をしているかもしれませんが、不況のご時世です。どんな仕事でもかまわないといった感じで応募してくる方々もいるでしょう。内容を少し割り引いて評価することはできますが、ソフトウェア技術者を採用する担当者は、この話を全否定することが難しいかもしれません。ソフトウェア開発の現場の多くで、生産性の向上にアタマを悩ませています。ありえないような酷いソース・コードを書くプログラマに苦しめられたという体験談はネット上にあふれています。

これが昔話なら、理解できなくもありません。昔々、と